

Environment Coping Forum News Letter

南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究

発行: 京都大学東南アジア研究所 編集: 南出和余
 住所: 〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
 URL: <http://ecf.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

～ECF第5回ケーススタディ報告～



カグラチヨリに向かう

11月8日14:30ダッカ空港から外に出た。今回のケーススタディには、山口大学のエクステンションセンター准教授の辰巳佳寿子さん、農学部教授の宇佐見晃一さんも参加された。2人とは空港で待ち合わせて、他のNGOメンバーや京大東南アジア研究所の矢嶋吉司さんらと落ち合うために、ダッカの南玄関ともいわれる中継地ジャットラバリに向かった。

今回のケーススタディは、バングラデシュでは5回目(最終回)となるカグラチヨリ県カグラチヨリシヨドル郡で行われた。ジャットラバリを出たのが16:35。私たちが向かうカグラチヨリへのルートや、カグラチヨリ周辺のこれまでの政治状況に関して少しでも知識のある方ならば、16:35にダッカのジャットラバリを出発するなど「なんと無謀な」と捉えられてもしかたがない。私たち自身、「大丈夫か?」と何度もコーディネーターのSSS職員ビモール氏に念をおしたほどだ。私たちが通ったルートはチッタゴンの街を経由するものではなく、フェニーの街から丘陵地帯を通り、インドのトリプラ州との国境をかすめるようにしてカグラチヨリに直通するショートカットのルートだった。途中、カグラチヨリ県に入ってからすぐの丘陵街ラムゴールで検問があり、この検問が夜半には閉められると聞いていた。検問所が占められるのは、通行人の安全のためということになっている。カグラチヨリは、「シャンティ・パヒニ」と呼ばれていた少数民族反政府ゲリラ活動の最も盛んな地域の一つとして知られている。夜半の通行に安全が確保されるのかと、誰もが半信半疑だったことだろう。しかし、政権がアワミリーグになったことも影響しているのか、幸い、私たちは、検問所ではゲートを開けてもらい、2台のステーションワゴンと地元NGOのバイクの先導で、宿泊と研修を行うカグラチヨリのボルジャントン・ホテルに23:00に到着することができた。

参加者

【ECFメンバー (12NGO)】

1. Ahmed Yusuf Harun, IDF
2. Md. Kausar Ahmed, DUS
3. Md. Raisuddin, JRDS
4. Md. Mizanor Rahman, JRDS
5. Md. Jahangir Alam, TMSS
6. Pankaj Sarkar, SATU
7. Md. Hafizur Rahman, PAPRI
8. Md. Ayub Ali Mridha, BSUS
9. Md. Abu Hanjala, AAN
10. Md. Moksadul Alam, ProjuktiPeeth
11. Kanchana Rani Das, CHCP
12. Nani Gopal Sarker, UDOY
13. Bimal Kanti Kuri: SSS
14. Nazmun Naher Kaisar:
ECF Secretariat Officer

【研究者チーム】

15. 安藤和雄: 東南アジア研究所准教授
16. 矢嶋吉司: 東南アジア研究所研究員

【オブザーバー】

17. 宇佐見晃一: 山口大学農学部教授
18. 辰巳加寿子: 山口大学准教授



写真1) 焼畑と焼畑のための手作り小屋



←写真2) パラゴムノキ林
 ↑写真3) チークの林

真っ暗な林(といっても帰路、屋間に目に入ってきた景観は、パラゴムノキのプランテーションや茶園、チークの植林地であり、ここが開発が進む丘陵地だった。写真1、2、3)のなかの狭い七曲の坂道を、かなりのスピードを出しながらヘッドライトを頼りに走るのは、ダッカの街の運転手にはさぞ心細かっただろう。

私たちが訪れた時には不穏な状況にはなかったが、2010年2月19日夜半から20日にかけて、チッタゴン丘陵地域のランガマティ県バガイチュリ郡やカグラチヨリ県シヨドル郡で、ベンガル人入植者と軍による先住民族の村の襲撃、焼き討ちが起きた。新聞報道では死者2名となっていたが、現地関係者の話では、死者16名、負傷者30名以上の被害であったという。先住民族には仏教信仰が多く、仏教寺院も襲撃に遭い、仏像が破壊、焼き討ちに遭った。痛ましい限りである。一部の先住民は居住地を離れ、森の中で隠れている。

スケジュール

Session1

11月9日(月)

- 10:20 開会
開会のあいさつ
各参加者自己紹介
プログラム確認
ECFの目的、進め方
IDFのあいさつ
- 11:30 Tea Break
- 12:00 前回までのレビュー
- 13:10 日本訪問報告
- 14:00 昼食
- 15:15 日本訪問の写真紹介
- 16:15 TMSS・IDFの活動発表
- 20:00 夕食

Session2 フィールドスタディ

11月10日(火)

- Mahal Chara村女性グループグループ活動見学、質問
- Jhum (焼畑)見学
- シラハコール(洞窟)見学
- アルティラ・キャン(寺)見学

11月11日(水)

- BARI/Hill Agriculture Research Station訪問
- 農場(山、丘)の果実栽培見学
 - Noymile Toripura Gucco Gram (定住村): 定住農家訪問
 - ビハール(寺)見学

11月12日(木)

- ヘッドマン・バラ村/ヌンチョリ・トリバラ村: ビタミンAキャンペーン・女性グループ訪問
- マタイ・ブクル(デボタ・ブクル、山頂池)訪問

Session3 ワークショップ

11月13日(金)

- 9:30 カード記入
- 10:40 優先事実の発表
クラスター分類、
- 11:30 Tea break
- 11:50 発表の継続
- 13:40 昼食
- 15:30 発表の継続
分類と分析作業
- 18:30 アクションプランの説明
- 20:00 アクションプラン作成のためのグループ・ワーク
プレーン・ストーミング
夕食
- 20:45 グループワーク成果発表
- 22:50 クロージング
参加者による感想
- 23:00 終了

11月14日(土) 解散

チッタゴン丘陵が抱える問題

バングラデシュは、国土の9割近くがガンジス川(国内ではポッダ川)、ブラマプトラ川(ジャムナ川)、メグナ川という世界有数の大河が作る複合デルタの沖積大地である。しかし、東部ベンガル湾沿いミャンマーやインドとの国境沿いには丘陵地帯がある。この丘陵地帯は、インド大陸がユーラシア大陸に衝突してできた皺で、衝突の衝撃がよく皺の方向に現れている。丘陵は南北に幾重に走っている場合が多い。第4回ケーススタディを実施したハオールは、インド大陸がユーラシア大陸に潜り込むところにあり、沈降が続き、そのために地質構造的に大低地となっている。一方、衝突の皺でできた丘陵がチッタゴン丘陵であり、バングラデシュの国土の約1割を占める。カグラチヨリ県、ランガマティ県、バンドールボン県が丘陵地に位置し、「チッタゴン丘陵特別区」に指定されている。1997年12月2日、同地区での反政府勢力との平和協定の締結以降、1998年7月15日に「Ministry of Chittagong Hill Tracts Affairs」が設置された。上記3県の行政と開発はここが行っている(注1)。同特別区には、国民の大半を占めるベンガル民族とは異なる、チベット・ビルマ語派の民族チャクマやマルマを中心に、12以上の少数民族が暮らしている。3県の人口は、1991年の人口センサスでは974,447人で、うち501,114人が少数民族である。少数民族の多くは上座仏教徒、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒であり、イスラームが卓越する低地のベンガル民族とはきわだった違いを見せている。また、丘陵地が広範囲を占めることから、伝統的に焼畑(ジウム)を生業としてきた。低地ベンガル人が水田常畑を生業としてきたこととも大きく異なる。人びとは、チッタゴン丘陵少数民族を総称として「ジューマ(焼畑を生業とする人)」という名称を、自らのアイデンティティとしている。

チッタゴン丘陵は、民族的にも東南アジアやインド北東7州との近縁関係にあり、文化的、社会的、歴史的に深い関わりを持ってきた。古代にはアラカン王国に長く支配されていたこともあった。東パキスタン時代の1962年には、アメリカの援助で、電力開発のための世界でも有数規模のダム(キャピタイダム)が、チャクマ族が多く住むランガマティ盆地に建設された。それまでは、ベンガル人といえども、チッタゴンに住むベンガル人との往来があった程度で、平穏な焼畑を中心とする少数民族の生活は隔離維持されていた。しかし、ダムの建設により、10万人近い先住民族が移住を余儀なくされた。うち6万人は十分な補償が得られなかったと言う。また、平野部チッタゴン以外の地方からも、ベンガル人が徐々にこの地域に移り住むように

なり、土地をめぐる緊張感が必然的に高まった(注2)。バングラデシュ独立以降、「シャンティ・バヒニ」と呼ばれる反政府ゲリラの活動が活発になり、陸軍の駐屯、軍とゲリラの抗争が1997年まで続いた。ベンガル人入植者と少数民族との対立、それに介入する軍の悲劇が再び繰り返されようとしている。チッタゴン丘陵の問題の中心は土地問題にあり、少数民族の固有の文化(アイデンティ)の問題が根っ子にある。それを踏まえて、過剰焼畑が引き起こすとされる環境問題を、再考する必要がある。

(注1)Ministry of Chittagong Hill Tracts

Affairsホームページ

<http://www.mochta.gov.bd/>

(注2)ジューマネットのホームページ

<http://www.jummanet.org/cht/>

ケーススタディワークショップ

<11月9日>

今回のケーススタディワークショップの担当NGOであるIDFからの歓迎挨拶から始まり、ワークショップの目的、スケジュール、ECF活動などの諸点についての説明と議論を行い、参加者の本事業への理解を促した。また、今回のケーススタディがバングラデシュでの最終回となることから、他地域との比較のためにも、これまで行った4ヶ所での調査と議論をレビューした。参加者に喚起した点は、以下の通り;

- (1)従来のPRAとは異なるボトムアップPLA法
- (2)住民の近くで活動することがNGOの特徴
- (3)現場で活動しているNGOはドナーや政府のプロジェクト、プログラムの下請けとなっている場合も多く、現実にはトップダウン(外の考え)によりプログラムの内容が決定されている。従って、現場で活動するNGOが、住民のニーズ、地域に即したプログラムをドナーに提案することが重要
- (4)提案されるプログラムは、住民の持つ能力、経験、在地の知恵を基にし、NGOのこれまでの活動、経験からの問題解決策(アクションプログラム)であるべきこと
- (5)これまでのECFの活動の成果からプロジェクトを作り、ECFとして活動資金獲得を目指すため、2010年1月にアクションプラン公開セミナーを開催する予定であるが、ここでは小規模事業(現場で決済できる金額と規模)を提案すること(実際にはセミナーは延期され、1月はアクションプラン作成のためのワークショップを開催した)
- (6)単独のNGOが事業を申請・独占するのではなく、ECF内NGO間の連携を強化し、得意・不得意分野を補うチーム・ネットワークによって事業計画の作成・実施すること

続いて、これまで4回のECFの取り組みについて、コーディネーターのSSSビモール氏より、要約が説明された。また、2009年8月下旬から9月上旬にかけてのビモール氏とシオンパ氏の日本訪問に関する報告があった。日本では、京都大学東南アジア研究所と京都大学生存基盤科学研究ユニットが共同運営する京滋守山フィールドステーションや、「プロジェクト保津川」、亀岡市文化資料館、篠町自治会、南丹市美山町かやの里資料館、同知井地区、山口県周防大島町の限界集落などを訪問し、コミュニティの崩壊、所得税システム、女性グループの起業、周防大島町文化交流センター（宮本常一記念館）の視察、地元の方々との意見交換などが行われ、その様子が報告された。

IDF(Integrated Development Foundation) & TMSS(Thengamara Mohila Sabuj Sangha)

次に、カグラチュリで活動するIDFとTMSSの活動紹介。

TMSSは、1964年にボグラ県テンガマラ村で活動を開始し、現在では63県に小規模金融事業を柱としてジェンダー差別や貧困の撲滅を主な目的とした農村開発事業を展開している、バングラデシュ有数のNGOの1つである。近年では環境対策としてソーラーパワープロジェクトを15県で実施、バイオガスプロジェクトも行っている。マイクロクレジットの他に、教育、保健衛生サービス、病院での保健衛生サポートにも力を入れている。今回のワークショップ会議開催地兼宿泊地である「ボルジトン・モーター」の運営も請け負っている。カグラチュリでのTMSSの活動は、現在はこのモーター事業のみであるが、経営が軌道に乗れば、他の事業を開始する予定である。

IDFは、グラミンバンクの設立当初からのメンバーたちによって、少数民族が集中していることなどチッタゴン地域の特殊性を考慮して1992年に設立された。チッタゴン丘陵やコックスバザールなどを中心し、小規模金融事業を基本として、農業、家畜、漁業、教育、健康と衛生、眼科障害予防のためのアイ・キャンプ、栄養指導など19の事業を展開している(IDFのホームページより)。チッタゴン丘陵での活動地はいずれも僻地であり、行政の代替として社会サービスを展開している。今回のフィールドスタディーは、IDFの小規模金融事業、栄養指導事業、農業関係の事業(BARI: Bangladesh Agricultural Research Institute)のカグラチュリ支所を、主な対象とした。

<11月10日:フィールド訪問1日目>

今でも焼畑を生業とする人びとが多いトリブラ族が多く住む、カグラチュリ県中央郡Mahal Chara村の2つの女性グループを訪問した。小規模金融事業が行われているグループ活動の見学や、グループメンバーへの聞き取り調査を行った。その後、土壌浸食問題が指摘されるJhum (ジウム: 焼畑)の現場を、調査参加メンバーが実際に見たことがないので、見学した。また、観光資源としての可能性があるシラハコール(洞窟)を訪問。さらに、少数民族の多くが信仰



写真)トリブラ族の女性

する仏教について、イスラームとヒンズー教徒である参加者の見聞を広めるため、アルティラキャン(寺)を見学した。

する仏教について、イスラームとヒンズー教徒である参加者の見聞を広めるため、アルティラキャン(寺)を見学した。



<11月11日:フィールド訪問2日目>

BARI, Hill Agriculture Research Stationを訪問し、所長からチッタゴン丘陵の農業に関する概要説明を受け、試験農場を見学。焼畑からテラス式の常畑、果樹などの有用樹種の植林、谷を使った貯め池などのデモンストレーションを見学した。ノEMAIL・トリブラ・グッチョ・グラム(Noymile Toripura Gucco Gram: 定住村)の新しい農業技術普及のモデル農家を訪問し、聞き取り調査を行った。その後、チャクマ族が集中して住む地域のビハーハラ(寺)を見学した。

<11月12日:フィールド訪問3日目>

IDFの栄養プログラム「ビタミンA摂取キャンペーン」が展開されている、カグラチュリの街から数キロ離れたトリブラ族の2つの村(ヘッドマン・パラ村とヌンチヨリ・トリブラ村)で調査を実施した。ヌンチヨリ・トリブラ村では、女性グループを対象にプログラムが実施されており、チャクマ族の女性がファシリテーターを務めていた。その後、村の水田とその周辺の丘陵で行われている焼畑を見学し、丘陵の頂上付近のヒンズー教の神が祭られているマタイ・プクル(デボタ・プクル、山頂池)を訪れた。ヌンチヨリ・トリブラ村は市街地から30分以内の近郊だが、一步街を離れると、焼畑が営まれる山並みが深く、インド、ミャンマー国境に向かって続いていた。



写真)栄養指導員を務めるチャクマ族女性

改良KJ法によるワークショップ

キーワードによる事実の選別

フィールドスタディーに参加したメンバー全員が、調査で観察、聞きとった事実について、キーワードと理由をつけて優先順位1位から3位までをカードに書いて発表し、その後、クラスター分類を実施した。特徴的な意見を紹介しておきたい。

Hさんは、「自己貯蓄の推進(マイクロクレジットを避けたボランティア活動)や焼畑は、貧困層にとって最適な方法。少数民族の暮らしは彼らに任せるべき。低地のベンガル人が山地に来るのはよくない」という意見を述べた。ベンガル人の中に、チッタゴン丘陵の少数民族の現実に触れることで率直な感想をもつ者が出たことは、少数民族とベンガル人との争いに一筋の光をみた思いがした。また、日本人Aさんは、「焼畑はバロマシェ・テロケット(12ヶ月で13畑)」というヌンチョク・トリブラ村で聞いた村人の言葉を紹介し、焼畑が村人の自給にどれだけ重視されているかを紹介した。さらに、バングラデシュ人Aさんは、エコツーリズム振興の可能性を、Pさんは、焼畑耕作による複数作物栽培の利点を述べ、新品種導入によって収量が上がったが、除草、肥料など投入が増加したことを近年の焼畑の問題として指摘した。Kさんは、少数民族の母語教育の必要性、教育機会の増強、また男が仕事をしないのが問題であるとのユニークな点も指摘した。Aさんは、飲用水確保(谷底から運ぶ)の大変さ、共通語(ベンガル語)教育の重要性を指摘。最後に、IDFコーディネーターから、スタッフトレーニングや情報公開の必要性が述べられた。低地からの定住者の入植、ベンガル人の焼畑耕作、雨季の多様な野菜栽培、バナナなどの果実栽培などにより、焼畑農耕に変化が生じている。焼畑生産物の販売(マーケット、山地の有効活用)や、農業、健康プログラムが有効であることが付け加えられた。山地の野菜・根菜・昆虫等の食用は、健康的な生活ではあるが、同時に病院や治療などの機会が必要という総括があった。

Analysis: 分類と分析作業

各発表を、項目と優先順位別に分類し、下記の表を得た。

Priority	1st	2nd	3rd	Sub-total	Remarks
Micro-Credit			2	2	
Health	1	1	5	7	1
Health			2	2	
V-A Campaign	1	1	3	5	1
Education/NFPE	1	5	1	7	
Scholarship				0	
Housing				0	
Solar System				0	
Agriculture	13	7	4	24	3
Jhum	9	3	2	14	
Agriculture	4	4	2	10	
WATSAN	1	1	1	3	
Land Right	1	1	2	4	
Others	1*	3**	3***	7	1
* Communication gap (language)					
** Women role/Eco-tourism/Marriage without registration					
*** Less access to various services/Laborious/Unemployment					
Total	18	18	18	54	6

保健は「保健」と「ビタミンAプログラム」、農業は「焼畑耕作」と「農業」のように、小項目に分類した。チッタゴン丘陵では、農業、保健、教育に対する関心が高いことが理解できる。

優先順位1位: 農業プログラムの重視、焼畑の積極的評価

BARIのHill Agriculture research Stationは焼畑からの転換を目標とし、焼畑に対してマイナスの見方をしているが、丘陵では焼畑は持続可能で、水田をもたない貧しい村人にとっては有益な農法であるというのが皆の合意となった。ヌンチョリ・トリブラ村では、104世帯のうち70世帯が水田のない土地なし農民であった。焼畑で多くの作物が栽培されていることから、農業関連プログラムが最も高いスコアを得た。ビタミンAキャンペーンにおいても、ビタミンAを含む野菜栽培の重要性が指摘され、農業プログラムが効果的であることを確認した。

優先順位2位: 農業と教育の必要性

少数民族は固有の言葉を持ち、各民族の文化的発展にとって母語教育が不可欠であるという認識を、参加者の多くがもったことは、バングラデシュの独立がベンガル語公用語運動から始まったという歴史を共有するメンバーたちにとって当然の指摘かもしれない。また、IDFのローカルスタッフであるチャクマ族の人たちの、トリブラ族の村人に接する丁寧で対等な態度は、ベンガル人村落での村人とNGO職員の関係とは大きく異なっていた。これには文化や母語を異にするという特殊な事情もあるが、NGOの住民との接し方を大いに考えさせられた。

農業が多くの票を集めたのは、貧しい人びとの生存のためには焼畑が必要であるという認識を参加者が強く持ったことを示す。政府は丘陵地の個人所有化を勧めているが、そこは本来、誰の土地でもなかった。ヌンチョリ・トリブラ村では今でも、たとえ個人の所有地であっても、村人は自由に焼畑を行うことができる。丘陵地を国有または公有にし、誰でもアクセス可能にすることができれば、貧困層のセーフティネットが確保される。

優先順位3位: 健康と衛生

丘陵地であることから飲料水確保のためには女性が谷底から運ばなければならない。これの改善と、トイレが伝統的になく、簡易トイレの普及が必要である。

表から明らかなように、マイクロクレジットプログラムの優先順位は低い。これは、融資の直接的効果が疑問視される風潮のなかで、融資事業を積極的に評価できない雰囲気があることと、焼畑は投入コストが少ないのでマイクロクレジットの必要性が小さいことを示している。

最後に、前回、第4回ケーススタディ時にアクションプランが作成され、PACTとHELPに大別された。チッタゴン丘陵においては、以下のアクションプランが提案された;

- HELP ⇨ Eco-friendly Jhum based Livelihood Program
 - ⇨ Poultry and livestock program
 - ⇨ NFPE
 - ⇨ Natural Water Management Program
 - ⇨ Low cost Hilly Sanitation Program
- PACT ⇨ Cultural Heritage

(報告: 安藤和雄)